

# おなべまえ 小鍋前遺跡

－ 那須烏山市大里 －

小鍋前遺跡の発掘調査は、水田や畑など農地整備の工事に先立って、平成16年4月から平成17年3月までの約1年間行われました。

調査では、縄文時代中期から後期前半（今からおよそ4,500～3,800年前）の食糧として木の実などを貯蔵していた袋状土坑ふくろじょうどこうと呼ばれるたくさんの穴や、家の跡たてあなじゅうきよあと（竪穴住居跡）などが発見され、縄文時代の大きな集落跡があったことが明らかになりました。

袋状土坑は、調査した区域の東側からまとまって発見されましたが、上方が削平され、残念ながら入り口部の狭い部分が残っているものはほとんどありませんでした。中からは、日常生活で使われた縄文土器や、木の実などを磨りつぶすための石皿いしざらや磨石すりいしなどの石器がたくさん出土しました。93号土坑からは、破片も含め十数個体の土器が出土しています。

出土した縄文土器は、東日本各地の特徴的な装飾が施されたものがたくさんあり、4,000年以上前に周辺地域との密接な交流があったことが理解できます。

ふくろじょうどこう

## 袋状土坑

- 大地に掘られた食糧貯蔵庫 -

縄文人はシカやイノシシなどの動物よりも、木の実や山菜などの植物性食物が主食であったと考えられ、食糧が少なくなる冬から早春に備えて、秋に収穫した木の実などを地面に穴（土坑）を掘って貯えていました。

この穴は、入り口が狭く底が広い巾着袋に形が似ていることから、袋状土坑と呼ばれています。この形状に掘るのは大変ですが、温度や湿度を一定に保つことができ、短期間の食糧保存には最適であることから、縄文人の知恵をうかがうことができます。しかし、発掘調査で発見されるものは、貯蔵の役目が終わったものがほとんどで、壊れた土器を捨てるゴミ穴に転用されたものが多いようです。

袋状土坑は、栃木県の縄文時代中期（4,500年前頃）を代表する遺構です。那珂川町<sup>みわなかまち</sup>三輪仲町遺跡や益子町<sup>ごれいまえ</sup>御霊前遺跡などでは、高台からたくさん重なって発見されています。



袋状土坑を半分に切った様子（大田原市品川台遺跡）



高原山

荒川中学校

主要地方道宇都宮烏山線

荒川

JR 烏山線

小鍋前遺跡